一学年　やりたいことを発見し、伝える

概要

実施期間： 7月24日-10月13日
実施コマ数（時間）： 28コマ
（20.5時間）

目的：

- 自分の考えていることを**言語化、見える化し、現実のものにするまでの道筋を描く**ことができる
- 様々な**思考の整理法**を活用し、自分の考えを明確にしていくことができる
- **多様な年代や立場にある人から、助言を求め**、それを建設的に自分の思考の質を高めるために活用することができる
- **他者に的確なアドバイス**を与えたり、**尊敬できる点や強みを見出す**ことができる
- **コミュニケーション**のための様々な手段を効果的に使いながら、自分の考えを的確に説明できる

生徒の声

「自分は、もっといろんな人と出会えば、いろんな体験もできるし、可能性も広がると思った。いろんな人とつながれば、できることも増える。だから、まずいろんな人と話していこうと思った。」

「これまでは自分のことを知りたいとか、物事を深く知りたいとか、あまり思わなかったけど、今回の活動で、いろんな事をもっと知りたいと思えました。これからは自分で行動していきたいです。」

「（この活動を通して）自分の頭の中をきれいに整理することができた。それによって、今何をすればよいのかがわかったり、問題がわかったりして、やりたいことを見つめることができた。」

「自分の考えを人に伝えることが、僕はあまり得意ではないと思っていたけれど、意外と自分は話せるんだということがわかった。」

授業設計について

自分の考えていることを整理する方法として、Will（やりたいこと）、Must（しなければいけないこと）、Can（できること）に分けて見つめてみるというアプローチの仕方があります。今回の総合学習では、このWill（やりたいこと）を、あえて仕事や社会貢献などに限定せず、自分の強み、やりたいこと、興味、得意なこと、詳しいこと、関心など、幅広く見つめる機会としました。

さらにこの「やりたいこと」を、自分の中だけで突き詰めて考えるのではなく、他者に積極的に伝える中で整理する時間を設けました。生徒が思いを伝えた相手は同級生だけではありません。授業中盤の「トークフォークダンス」には、津和野を中心に、益田や吉賀などにお住まいの70名以上の大人の方に、昼間の貴重な時間を割いてご協力いただき、生徒の「やりたい」に耳を傾けていただきました。この過程を通し、生徒に、津和野でも、津和野だからこそ、自分の思いを現実のものにするための資源や人の繋がりが多くあることに気づいてもらうことをねらいとしています。

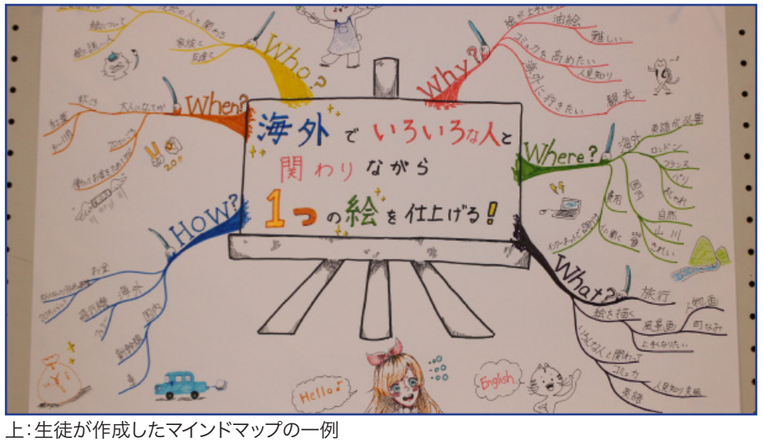
生徒の最終成果物であるマインドマップは、学習の結果であると同時に、生徒がどんなことを今考えているのかを知るためのデータとしてすでに大変役立っています。マインドマップを元に、生徒の興味関心を把握し、その生徒に相応しい機会を提示してあげることができる他、このマップを生徒自身が折に触れて見返すことで、自分の原点に立ち返ることができます。こうした取り組みが、生徒の視野を広げ、卒業後の可能性をできる限り大きなものにできると考えています。

授業にご協力いただいた山岡浩二さんのご感想

山岡さんが連載されている山陰中央新報のコラム「世事抄録」にて、今回の授業に触れていただきました（平成29年9月21日）

（一部抜粋）「先日、ある男子高校生（16）の将来の夢を聞かせてもらう機会があった。人生の先輩としてアドバイスを求められたが、公務員一筋の人生を送っただけの小生には、大したアドバイスもできなかった。

それよりも、その生徒が、将来の目標として掲げていた言葉に驚愕した。それは『100歳まで生きる』『豊かな老後を送る』というものだ。小生らのように、還暦を過ぎた者が言うのであれば、別に不思議ではない。ところが、これを16歳の高校生が、堂々と人生の将来設計の柱に据えていたことには、本当に驚かされた。」



上：生徒が作成したマインドマップの一例

活動の流れ

コマ数

7月　2コマ

活動をはじめるにあたって

総合学習は、普段の教科の授業とは活動の内容が大きく異なります。講義的な時間はほとんどなく、個人や仲間と手を動かしたり、話し合う中で、共通のテーマや課題に向き合っていきます。そのため、授業の目的や流れを明確に繰り返し説明し（アカウンタビリティ）、生徒たちがこの時間を自分の成長にどう繋げたいかを問うことを大事にしていきます。

9月　9コマ

やりたいことを出してみよう

一年生の総合学習の夏休みの宿題は、やりたいことを100個書いてくることでした。これは**ブレインストーミング**という、ビジネスの現場でも広く使われる思考法です。自分が思っていることを、集中的に、質を問わずに出してみることで、自分が意識していなかった思いや考えにたどり着くことができます。100個の付せんに書かれた「やりたいこと」を様々な視点から見つめ、最終的に、これからじっくり実行していきたい一枚を選ぶ作業を行いました。

9月　6コマ

やりたいことを伝えよう

トークフォークダンスは、京都の小学校でその原型が生まれ、福岡県の福津市の先進的なコミュニティスクール運動の中で発展した一対一の対話手法です。ここでは、この手法をお借りして、自分のやりたいことを、他者に伝える中で研ぎ澄ませていきました。同級生同士で一度行った後、大人の方に対して自分の思いを伝えました。生徒の人数に匹敵する、実に70名を越える地域の大人の方が生徒の声に耳を傾け、アドバイスやエールを送るために集まってくださいました。

10月　8コマ

やりたいことを具体化しよう

トークフォークダンスなどで見つめた自身の「やりたいこと」を行動に移すため、具体的な手立てを考えていきました。ここでは、アメリカで開発され、広く教育現場でも実践されている**マインドマップ**という思考法を使い、また、**5W1H**（いつ、どこで、誰と、何を、なぜ、どうやって）のフレームを使って自分の考えを整理していきました。文章だけでは伝えきれない思いを、一人ひとりが自分だけの独創的なマインドマップに表現しました。

10月　3コマ

クロージング

この20時間の授業の最後には、一人ひとりが作り上げたマインドマップを、同級生同士でトークフォークダンス形式で共有していきました。この中で、普段の生活では知り得ない同級生の興味や関心、情熱がどこにあるかに触れ、相手の「すごいな！」と思うところをコメントし合いました。プロジェクト型学習には必須の**ふりかえり**の時間には、20時間の作業の過程で残した成果物を見直しながら、自分の成長を言語化しました。

二学年　在校生が考えるツコウ110周年

概要

実施期間： 7月10日-7月24日
実施コマ数（時間）： 28コマ
（20.5時間）
目的：

- 高校生としての感覚や視点を活かしながら、**独創的なアイデアや解決法**を提示することができる
- チームで、お互いの**強み**を活かしたり、**足りない点**を補い合いながら協働できる
- チームメンバーの意見や考えを尊重しつつも、**多くの人にとってベストな選択肢**にたどり着くことができる
- 他者のアドバイスを建設的に聴き、**実現可能性**を考慮しつつ、**学校と地域にとってプラスになるアイデア**を見出すことができる
- アイデアを、**行動に移すのに必要なステップ**を明確にすることができる
- 自分やチームの意見を、わかりやすく、また相手が協力したいと思えるように、**効果的に伝える**ことができる

生徒の声

「人それぞれ考え方も感じ方も違うので、いいなと思うこともちろん違い、アイデアを一つに絞るのは大変でした。それでもいろんな人の考えを知ることが出来たので本当によかったです。」

「総合学習を通じて、自分が苦手だと思っていた意見を人に伝えるということが上手だということに気づきました。人に直接的に言葉を伝えるのは苦手ですが、間接的に図などを使い伝えることが私はできるので、強みとして掲げたいです。」

「今回の総合学習では、何かを成し遂げたというより、自分を人間的に成長させることが出来たという感じがした。皆と関わっていく中で、皆がどういう風に人と接しようとするのかをよく見て考えて実践で活かすことが出来たと思う。」

授業設計について

7月10日からの約二週間をかけ、第二学年の生徒は、今年度迎える高校創立110周年に対して、在校生としてできることを考えました。「高校が、地域や卒業生に対してより開かれた高校となるにはどうしたら良いか」というテーマを元に、最終的には、高校の「過去・今・未来」を念頭に置いた、「記念誌」「当日イベント」「継続性のある記念事業」に対して提案を行いました。授業後には実行委員会が組織され、その実現に向け、現在も準備を進めています。

今後の学び方の手法として見直されているプロジェクト型学習では、取り組む課題が実社会に直結していること、かつ、生徒が身近に感じられるテーマであることが、効果的な学びを生むために重要であると考えられています。津和野高校110周年を在校生自らの手で考え、実行に移していくという今回のテーマは、まさにこの二つの要件を満たしているといえます。

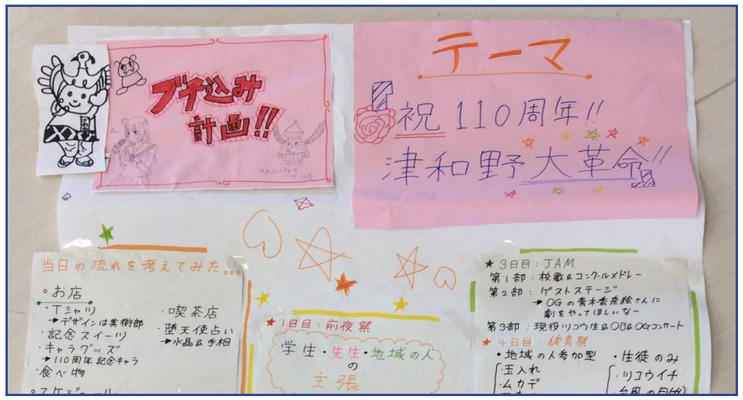
発表の審査員として来られた卒業生からのコメント

「リサーチが徹底されており、すばらしいと思った。（審査した生徒の一人は）過去の事例を調べ、SLを貸し切る際に必要な値段まできちんと把握していた。『本当にSLを貸し切ることはできるのか』という質問に、根拠を提示しながら対応することが出来ていた。」

「自分が高校生の時には、人前でプレゼンをしたり、地域の人と交流する機会はなく、覚えていないだけかもしれないが、学校は閉じた空間だったように思う。学校の外へのつながりを持つ機会があるツコウ生がうらやましい。」

「高校を卒業すると、高校との関わりを持ちにくくなる。高校との関わりを持ちたいと思っていても持てない人がこの町にはたくさんいる。ツコウ生には、110周年記念のプロジェクトを通してOB/OGとのつながりを作っていってほしい。」

「自分が高校生の時には、人前でプレゼンをする機会があまりなかった。ツコウ生はプレゼンの能力が高いと思った。」



上：生徒の提案の一例

活動の流れ

コマ数

7月

スタートアップ

5コマ

活動を自分ごと化することが重要な「スタートアップ」の段階では、110周年事業に取り組むことが、学校や地域をより良くしていくことにつながっていることを説明した後、同窓会長や学校長が生徒に正式に「**依頼**」するという形を取らせて頂きました。また、取り組む仲間との関係性の構築や共通目標の設定を行う「**チームビルディング**」、毎回の活動を欠かさずに言語化し、学びにつなげるための「**ふりかえり**」の大切さについての説明を行いました。

インスピレーションタイム

3コマ

世界の教育関係者や民間企業が立ち上げた国際団体ATC21sは、21世紀のグローバル社会を生き抜くために求められる能力として、**協働力、批判的思考力、コミュニケーション力**に加えて、**創造力**を挙げています。しかし、高校生は、中学の一番多感な思春期を脱し、かつ社会人予備軍とも目される段階です。そんな高校生の創造力は必ずしも豊かな状態であるとは言えません。高校生が自由に発想するための場づくり、きっかけづくりとして、インスピレーションタイムを設けました。

発散と収束

8コマ

But（そんなの無理じゃない？）ではなく、Yes and（いいね、だったらこうしよう）を仲間と繰り返し、十分な量のアイデアを出し切った後に、様々な視点からベストな解決策を決定する ー この**発散と収束のプロセス**は、プロジェクト型学習において最も難しい段階であると同時に、様々な場面で応用できる学びがたくさん詰まっています。「意見をまとめる」という漠然とした言葉ではわからない、「協働すること」「相手の意見を尊重すること」「感情の折り合いをつけること」の醍醐味や難しさを味わうことができました。

発表

7コマ

ポスターセッションは、壁またはホワイドボードに発表内容をまとめたポスターを貼り出し、掲示者が、自分の発表を聞きにきた人に適宜説明を行うスタイルの発表です。このやり方ならば、人前で話すのが苦手な生徒でも、自分の伝えたいことを、目の前の相手に伝えることができます。プレゼンテーションに苦手意識を感じていた生徒の多くが、この発表の形態に手応えを感じていました。発表内容は、**アクションプラン**という形式を採用し、「どうやってアイデアを形にするか」に焦点を当てて作り上げました。

クロージング

5コマ

一つの経験が自分やチームの成長にどう役に立ったのか、さらに、現在の自分に身についているスキルや知見を、独りよがりではない形で表現することは、それ自体社会が必要とする力です。今回の総合学習では、この「**ふりかえり**」を、体系的に、計画的に行えるように設計しています。そのため、ここから出てきた生徒のふりかえりも非常に精度の高いものになっています。また、今回の授業は、実際に**行動に移す**ことを意識して閉じています。その後実行委員会がたちが上がり、110周年の実施に向けて着々と準備をしています。